

## 館林キリスト教会 デボーションノート（2025年）

1月1日 今日の通読箇所 サムエル記下 6章16～23節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU062.mp3>

神の臨在のしるしである契約の箱は、昔エベネゼルの敗戦の時、いったんペリシテに奪われた。その後返還のあとも、国境に近いパアレユダにおかれたままになっていた。今、ダビデはエルサレムに仮の聖所を建て、そこに契約の箱を移し、20年ぶりにイスラエルの礼拝の秩序を回復しようとする。一大盛儀と言わなければならない。ウザヤ、ダビデの妻ミカルの挿話なども教訓であって、我々はダビデから励ましを、彼らからは警告を学ぶのである。

1月2日 今日の通読箇所 サムエル記下 7章1～20節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU071.mp3>

むかしイスラエルが、テントに住んで荒野を旅行する間は、神の家、すなわち礼拝の施設も、移動式のテント、つまり幕屋だった。それから今日まで、聖所があったと言ってもほとんど仮家だった。今やダビデの時代に至って、ようやく国は安定繁栄におもむき、人々も自分の家を建て、王もその宮殿をいとなむに至って、ダビデが本格的な神殿の建築を思い立ったのは、まことに良いことだった。自分の生活や贅沢にのみかまけ、つい神様のことをおろそかにするのは良くない。このダビデの神に対する真実は、更に大きな祝福のいとぐちとなるのである。

1月3日 今日の通読箇所 サムエル記下 9章

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU091.mp3>

ダビデは神のみ心によって王となり、外敵を征服し、王国の諸制度を整えるなど、いわゆる創業の経営に多忙であったがその間にも礼拝の秩序の回復をはかり、また没落したサウルの一族をあわれむことを忘れなかった。今はダビデを恐れて、息をひそめている彼らをさがし出して、それぞれ保護を加えた中に、ヨナタンの遺児で足なえになったメピボセテを見出した事は、お互いに大きな喜びであった。ダビデは彼を慰めて、以後王族の一人として待遇したのである。どんなに多忙な間にも、神に対する礼拝と、兄弟に対する愛の実行とは、クリスチャンにとって決して欠かせない大事だ。

1月4日 今日の通読箇所 サムエル記下 10章1～14節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU101.mp3>

アンモンの王は最後までしつこくダビデに抵抗する。ダビデは宥和の態度で、新しいアンモン王即位のお祝いに、使者たちを送ったのだが、彼らは使者を侮

辱して追い返し、戦争の用意を始めた。ダビデは何回かの攻撃によって、アンモン、スリヤの連合軍を打ち破り、翌年の春には、いよいよ彼らにとどめをさすための作戦に取りかかり、ヨアブらに軍隊をまかせ、予定通りアンモンの首都ラバを包囲した。しかしもうダビデ自身が出馬するまでのこともないと見て、王自身は王宮に止まっていたが、この高ぶりや油断と安逸は、やがて恐ろしいバテシバ事件の伏線となってゆくのである。

1月5日 今日の通読箇所 サムエル記下 11章1～21節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU111.mp3>

姦淫は愛慾から、殺人は憎悪から始まる。この二つは人間の大きなエネルギーで、小説やドラマのテーマ、また多くの犯罪の動機となる。神の恵みと力によって、ハンドル、ブレーキをしっかりと握らないと危険だ。ダビデほどの人物でも、この欲望を悪魔に刺激されてハンドル、ブレーキを放し、人妻バテシバとの姦淫、ひいてはその夫ウリヤの謀殺と、恐ろしい二つの罪を犯してしまったのである。何という恐ろしいことか。

1月6日 今日の通読箇所 サムエル記下 12章1～15節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU121.mp3>

ウリヤの戦死によって、バテシバが未亡人になると、今やダビデは彼女を後宮に召し入れ、自分の妻妾のうちに加えた。数ヶ月は表面何事もなく、ダビデ王の寵愛はバテシバ一身に集り、二人はいわゆる愛慾の陶酔の中にあつた。しかしこの間、社会の暗黙の非難があり、ダビデ自身も、ひそかに良心の呵責に苦しんだ。その間の事情は、詩篇32篇などに、ダビデが自ら記している。やがて神からつかわされたナタンは、はっきりダビデに忠告し、ダビデは真剣に悔い改めるに至った。そのころの彼の心境は、詩篇51篇などによくあらわれている。

1月7日 今日の通読箇所 サムエル記下 13章1～19節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU131.mp3>

ダビデは女性関係が開放的で、それがもともと彼の大きな欠点であつたが、今やバテシバにおいて決定的な失敗となつたのだ。上のなすところは、下おのずからこれに習う。ダビデの子アムノンとタマルの間の不祥事も、王家における一種の連鎖反応であつて、彼らが成長する間に自然に呼吸した王家の空気と、今度のバテシバ事件の影響に違いない。それにしてもアムノンは一端の欲望から、何という乱暴で無責任な、そしてタマルにとってはかわい相なことをしたものだらう。

1月8日 今日の通読箇所 サムエル記下 13章20～39節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU132.mp3>

ダビデの宮廷には、母親の違う大勢の王子たちがいて、それぞれに取り巻きも

いるが、その中には、陰険な悪公子もいる。アムノンにはわがまま無責任な王子で、タマルは無邪気を通りこして、不注意な娘だったのだ。そしてアムノンの側近のヨナダブは、何となく立ちまわって、王子たちの間にもめごとを起こしては面白い趣味があるらしい。もともとアムノンをそそのかし、悪知恵をつけ、タマルに乱暴させたのもヨナダブだったのだ。今タマルの兄アブサロムが、怒りを深く胸におさめて表にあらわさず、注意深く時期をうかがって、とうとうアムノンを殺し、妹の恥辱の復讐をする、その影にも、ヨナダブの策動があるような気がする。

1月9日 今日に通読箇所 サムエル記下 14章1～17節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU141.mp3>

アブサロムは、アムノン殺害事件の結果、王に退けられてゲシュルに行って謹慎することになった。かくて3年たったが、賢明なヨアブは、ほとぼりもさめ、そろそろ王の心もアブサロムを求めているのを察し、テコアのかしこい女に命じて「いつまでもアブサロムを追放したままでおくのは良くありません」という意味の忠告を、一つの話に託して、王に申し上げさせた。さきのナタンの忠告の場合と同じく、ある別のケースを示して、客観的に道理を考えさせ、さてそれを本人に当てはめて忠告する、という、いわゆる「諷諫」が、よい結果を見た例である。それにしても、忠告というものは良いものだ。

1月10日 今日に通読箇所 サムエル記下 15章1～18節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU151.mp3>

アブサロムの野心はだんだんエスカレートして（勿論、取り巻き達の扇動もある）今は私兵を養成し、人々の不満をかき立てて自分を売り込み、軽率な人々の人気を集めた。（今の政治家のジェスチャアや握手と似ている）そして、とうとう名目をもうけてヘブロンに人々を結集し、ダビデ王に反旗をひるがえしたのである。「まさか」と思っていたダビデ王が、気がついた時はすでに遅く、今は身一つで逃亡する外なく、従うのはほんの一族の者と、ほかに異邦の傭兵たちのみであった。

1月11日 今日に通読箇所 サムエル記下 15章19～37節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU152.mp3>

「おちぶれて袖の涙のかかる時人の心の奥ぞ知らるる」とは、よく歌ったものだ。ダビデは今こそ、ふだんの表面的な交際ではかくれて見えない、忠信な者と、軽薄な者との相違を知ったのである。彼がそのあとを慕った祭司たちによってかかれて来た、神の契約の箱を、この際、一応エルサレムに戻したのは良いことだった。契約の箱を錦の御旗のように用い「自分こそ神の臨在、神の正義、神の祝福を代表するもので、ダビデ王にそむくことは、すなわち神にそむ

くのだ」と宣伝したいのは山々だが、一切の配剤を神にまかせたのだ。

1月12日 今日の通読箇所 サムエル記下 16章1～14節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU161.mp3>

イスラエルの王位が、サウル家からダビデに移ったのは、神様の摂理、自然の推移であって、決してダビデが奪い取ったのではないことは、今まで学んできた通りだが、もとのサウル家の家来たちの中には、こまかい事情がわからないで、ひたすらダビデを恨み憎む者がいたのもやむを得ない。その1人のシメイは、ダビデの没落につけこんで、口ぎたなくダビデを呪い、一方、ダビデが恵みをほどこしたメピボセテも、今やダビデを裏切った。という情報が入った。(これは誤報) この間、ダビデは黙々と、ただ神の裁きとあわれみに一切をゆだね、短気な仕返しなど、決してしようとはしなかった。

1月13日 今日の通読箇所 サムエル記下 17章1～14節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU171.mp3>

アブサロムに味方した策士アヒトペルは、アブサロムの反乱が成功すれば、その臣下の中で、自分が最高位になれる見込みで、本気でアブサロムに賭けたと思う。反対にホシャイは、アブサロム側の情報をダビデに通報し、またアブサロムの作戦を混乱させるために、ダビデ側から送りこまれた、言わばスパイである。ところが開かれた作戦会議で、ホシャイの出した提言の方が、アヒトペルのそれよりもアブサロムの気に入った。アヒトペルの提案が、アブサロム自身の勇気を必要とするものであるのに反して、ホシャイの方が、大がかりで、安全で、いかにも王様気分の戦争になり相だったからだ。しかしこれは、アブサロムの致命的な失敗となった。

1月14日 今日の通読箇所 サムエル記下 17章15～29節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU172.mp3>

アブサロムは、ダビデ王が、いわゆる「ウリヤ殺し事件」などによって、イスラエル全体の信頼と支持を失っている、と見込んで反乱を起こしたのだろうか。この章などを読むと、民衆の中に、案外に根強い、かくれた、ダビデ王支持の空気があったのがわかる。社会的な常識から言っても、長年にわたる信頼を、1つの失敗のため、1度に根こそぎ失ってしまう、ということはないらしい。かえって一般の民衆は、アブサロムのような野心家に対して、不安と警戒の気持ちを持つものと見える。

1月15日 今日の通読箇所 サムエル記下 18章1～15節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU181.mp3>

いよいよ戦争が始まった時のダビデの気持ちは「戦争には勝たねばならぬ。しかしアブサロムを殺したくない」という、複雑なものだった。だが父親として

の、そのダビデの愛も、ダビデの命をねらい剣を抜いて刃向ったアブサロムを結論的には救い得ず、アブサロムは反乱軍の間に刺し殺された。このアブサロムの立場は、キリストの救いを拒絶し、あくまでも神にさからって、遂には自ら滅びをまねく人に似ている。そしてここでまた、ダビデの態度をめめしいものと軽蔑し、独断でアブサロムを殺してしまった。いつもの通りのヨアブの姿勢が目立つ。

1月16日 今日を通読箇所 サムエル記下 18章16～33節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU182.mp3>

恐ろしい戦争もダビデの勝利に終わり、反乱軍は散り散りになった。しかしアブサロムの安否を気づかなくて、安き心とてなかつたダビデは、ついに「アブサロム殺害」のニュースを聞かなければならなかつた。「わが子アブサロムよ、わが子アブサロムよ。ああわたしが代って死ねばよかつたのに」とダビデは泣いた。私たちは彼の姿の中に、罪人の滅亡を悲しむ、神の心を見ないだろうか。すなわち、キリストがせっかく罪人に代って死に、復活して下さつたのに、その救い主を拒絶して、自ら滅びの運命に陥る人々のために悲しむ、神とキリストのみ心を思わざるを得ない。

1月17日 今日を通読箇所 サムエル記下 19章1～15節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU191.mp3>

サウル王は強固な意志の人であり、ヨアブなどは冷静な計算の人であるが、ダビデはどちらかと言うと、涙と情の人である。これはダビデの良さであるが、長所は時に短所、欠点に変質する。今ダビデがアブサロムの死を悲しんで取り乱し、今日一日、ダビデ王の勝利のために戦って犠牲となつた、多くの戦死者、戦傷者、その家族の気持ち、またせっかく戦争に勝って凱旋した将兵の気持ちを考える余地がなかつたのは、公人として本当にまずいことであつた。この際のヨアブの忠告はまことにもっともである。「感情の自制」は誰にも大切な事だ。

1月18日 今日を通読箇所 サムエル記下 19章16～30節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU192.mp3>

今や主がダビデと共にい給うということが、明白に証しされたので、さきにダビデを呪つたシメイも、すっかり恐縮してダビデの前に平伏した。ここでダビデが寛容を示したのは、更に一つの証しを加えたもので、以後シメイは一生涯、ダビデに心服したと思われる。一方デバは、足のわるい主人メピボセテを出し抜いて、ダビデに対していつわりの忠義立てをしていたことが、この際すっかりばれてしまった。いずれにしろ、物事が明らかにされる時は必ず来るものだから、お互いに心しなければならぬ。

1月19日 今日の通読箇所 サムエル記下 19章31～43節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU193.mp3>

ギレアデはヨルダン川の東、すでに砂漠地帯で、言わばイスラエルの辺境である。バルジライはこの地方の有力者の一人で、避難中のダビデ王のスポンサーとなった。さて戦争が終わった時のバルジライの、謙遜で、良く自分の分をわきまえた言葉は美しい。それに比べるとイスラエルの人々が(と言ってもその中心はエフライムだが)「ダビデ王に対する忠誠と努力で、ユダの人々に先を越された」と言っ、ユダに食ってかかる嫉妬心は見つともない。このエフライムのユダに対する嫉妬心はいつものことで後々まで災いの種だ。

1月20日 今日の通読箇所 サムエル記下 20章1～13節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU201.mp3>

不平不満のあるところ、いつもそれを扇動する者が出て来る。アブサロムの乱がおさまって、ようやく平静になろうとするこの国は今、エフライムを扇動して騒ぎを起そうとするシバの出現によって、再び分裂の危機にさらされることになった。ダビデはアブサロムを殺したヨアブをうとんじて、今度はアマサに兵を集めさせ、シバと戦おうとしたが、しかしアマサにはその実力がなかった。これを怒ったヨアブは「自分を出し抜いたのみか、テキパキ兵を集められないのは、この危機に際して重大な責任だ」と勝手にアマサを殺した。ダビデ王に対するいやがらせでもあるし、また自分のライバルを片付ける、ヨアブのいつものやり方だ。

1月21日 今日の通読箇所 サムエル記下 20章14～26節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU202.mp3>

ヨアブは悪い奴だが、政治家として、軍人としては実力がある。ヨアブの手によって、シバによる反乱は大事に至らず、早目に平定したのは結構な事だった。最後にシバは、自分の一族をまとめて、アベルに立てこもった。田舎町アベルは、シバの籠城と言う、とんだ巻き添えを食ったわけだ。しかしこれを包囲したヨアブに、この町の一婦人からこっそりある提案が持ちこまれ、この婦人の運動によって、提案通り町の人々はシバを殺し、その首を城壁から投げ落としたので、ヨアブの攻撃は終わり、反乱は鎮定した。しかし、どうもやり切れない話だ。

1月22日 今日の通読箇所 サムエル記下 21章1～9節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU211.mp3>

かつてサウル王が積極的に国を指揮した頃は、外敵を撃退し、国家は独立し、民族的プライドは高揚した。その反面、勢いに伴う行き過ぎもあった。ギベオン人の問題もその一つである。彼らは先祖の時代にヨシュアと特別な契約を結び、異邦人ではあるが、国内の居住と安全を許されていた。然るにサウル王の

頃、一部の人々から敵国の異邦人同様に見なされて、不法に殺された事件があった。彼らはいわゆる泣き寝入りをしていたのだが、サウル王家失脚の今となって、改めてダビデ王に訴え、復讐を要求した。彼らは他の賠償は拒絶し、あの事件の首謀者の子孫七人を吊したのである。恨みも深かったろが、仕返しもしつこく、かつ凄まじい。

1月23日 今日に通読箇所 サムエル記下 21章10～22節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU212.mp3>

一つの主張に対しては別の主張があり、この恨みに対しては別の恨みも生ずる道理で、この世に対立と戦争は耐えない。ここに絞首して吊された七人と、その家族は本当に気の毒な次第であった。一人の母親は訴える手段も、恨みを晴らす力もなく、ただ泣きながら我が子の死体を見守り、老いた手で、ともすれば寄って来る鳥や獣を追うとは、何という哀れな話であろう。強い者は談判もする戦争もする。しかし弱い者はいつも巻き添えを食って犠牲となる。我々は世界のために、日本のために平和を祈らなければならない。

1月24日 今日に通読箇所 サムエル記下 22章1～20節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU221.mp3>

ダビデの一生は文字通りのスリルの連続で、どうにもならない行き詰まり、あるいは一步を誤れば死という危険も、何回となく経験したのである。その間岩とか城とか、また盾とかは、軍人として身を守るために、ダビデにとって大切なものであった。「救う者」とは、イザという時に駆けつけて危急を救ってくれる、頼もしい援軍である。しかしダビデの生涯において、真に彼の城とも救いともなってくださったのは神様であった。行き詰まりや危険の多いことは、我々とても同じである。そしてダビデと同じように、生涯、神様が我々を助けてくださることはありがたい。

1月25日 今日に通読箇所 サムエル記下 22章21～36節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU222.mp3>

ダビデの生涯を読んできた我々は、ここに言われているように、彼が完全な人間でないことをよく知っている。しかし次の意味でダビデは正しく、そこに神に愛された祝福される秘訣があった。第一にダビデはいつも謙遜に正直に罪を悔い改めて、信仰による罪の許しを得ていた。第二に、とにかく力の限りみ言葉の光に従うことに努めた。異邦の王たちの暴虐無道を考え、あるいはイスラエルの後の諸王と比べてみても、ダビデが正しい王であったことは、疑いの余地がない。

1月26日 今日に通読箇所 サムエル記下 23章1～23節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU231.mp3>

「主の霊はわたしによって語る。その言葉はわたしの舌の上にある。」とは、説

教、日曜学校、証、その他のあらゆるメッセージの奉仕において、我々が常に祈り求め、かつ期待しなければならない標準だと思う。

8節以下には、忠誠、勇敢、そして力に溢れた、ダビデの将兵たちが紹介してある。ダビデといえども、ただ一人でその大業を成し遂げたのではない。ここに記された、大勢の協力に負うことが多いのは言うまでもない。

1月27日 今日に通読箇所 サムエル記下 24章1～14節

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/10SAMU241.mp3>

いつの頃か分からないが、ダビデの成功が絶頂だった頃、サタンの感動によって、一種の軍国主義的、国家総動員態勢を取ろうとしたことがあって、その準備として一種の国勢調査を行った。これはいつも征服に明け暮れる、世の諸王のような野心によるものと思われ、ヨアブをはじめ指導的な軍人たちも反対だったのだが、ダビデはあえてそれを強行し、今や神の怒りのご干渉を招くことになったのだ。神の祝福によって成功した場合も、勢いに乗って調子付くと危険だ。サタンはいつも狙っている。

1月28日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 1：1～14

「遠大な救いの計画」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/49EPE11.mp3>

エペソはアルテミス神殿を中心に偶像礼拝とそれに関わる産業で大いに栄えた小アジアの町です。その様子は使徒行伝19章等から知ることができます。パウロはこの町に伝道し、やがて教会が誕生しました。パウロはエペソ書をローマの獄中から書き送りました。手紙は書き写され近隣の諸教会に回覧されたようです。3～5節には神様の遠大な救いの計画が明らかにされています。13節には聖霊の証印を押された神の民について書かれ、この証印は現在の祝福と同時に、未来の時の保証です。6節12節14節、この世で救いの恵みゆえに神様を褒め称え、やがての時には、救いの恵みの尊さと栄光の輝きに圧倒されて神様の御名を褒め称えるのです。

1月29日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 1：15～23

「かしらとからだ」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/49EPE12.mp3>

パウロは教会の「主イエスに対する信仰」「すべての聖徒に対する愛」の様子を聞き感謝を捧げています。信仰と愛の実践の噂は何と嬉しい事でしょう。彼はさらに祈っています。「心の目が明らかにされて」救われた者に与えられている望み、神の国の栄光、神の絶大な力を知る事が出来るようにと。神の絶大な力はキリストに現れました。キリストは十字架の死で終わることなく甦えられたのです。そして最高の権威と権勢の方として立っておられます。驚くべきことに、教会のかしらは万物の上に立っておられるこのキリストであり、教会はキリストのからだです。教会はキリストの命に生かされ供給を受け、キリストの意思を受け、キリストのために、全器官が絶妙に各々の任務を全とうするので

す。

1月30日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 2：1～10

「憐れみに富む神」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/49EPE21.mp3>

パウロは2章で、神の救いの恵みを回顧しています。救われる前の私たちは「自分の罪過と罪とによって死んでいた者」、「この世のならわしに従って生きていた者」、「肉の欲に従って日を過ごしていた者」で、当然滅ぶべき者と定められていました。しかし憐れみに富む神は、私たちをキリストと共に生かし、共によみがえらせ、共に天上で座につかせてくださった方なのです。そして私たちが救われたのは、信仰によるのであり、この驚くべき恵みを世に証するためなのです。その信仰も神の賜物であって、人の行いによるものではありません。それは誰も誇る事が出来ないためです。このようにして、私たちは神の作品として、良い行いをするようにキリスト・イエスにあって造られ備えられたのです。

1月31日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 2：11～22

「十字架による和解」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/49EPE22.mp3>

パウロは語ります。あなた方は、かつてはキリストを知らない異教徒であり、聖書に基づく約束の知識も権利もなかったこと、何の希望もなく神なしの生活だったことを思い起こしなさい。しかし神様は、キリストの十字架によって、神様と和解させて下さいました。また、選民イスラエルと異教徒との相互の反目や不和も十字架によって終結したのです。今は父なる神様を信じ、共に神の民、神の家族なのです。この人々の集まりが教会です。教会という建物の土台は新約の使徒、旧約の預言者の働きです。礎石は「隅のかしら石キリスト」です。教会は、各時代、各地のクリスチャンが次々と加えられ、建て上げられ成長していきます。こうして真の和解と平和はキリストによって与えられるのです。